


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2019年7月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教師の学び合いの場を協働構築する意義  
—マレーシア人教師と日本人教師による社会的実践活  
動の分析から—

申請者氏名：木村 かおり

主査 福島 青史 署名 福島 青史   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 宮崎 里司 署名 宮崎 里司   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 小宮 千鶴子   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

## <本論文の概要>

本論文は、マレーシアにおける高等教育機関を事例とし、海外で活動する教師をエンパワーメントするために、自己研修、学び合い、そのための場を教師自身で構築することの必要性を主張するものである。全 232 ページ、全 9 つの章と資料からなる。各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、研究動機として、筆者自身がマレーシアの機関に関わることによって得られた問題意識が書かれている。その問題とは、個人の力で変えることができない制度やシステムの存在、そのシステムや制度から生まれる教師共同体間の「境界」、「矛盾した協調関係」、「固定的な役割観」といった矛盾である。そして、これらのシステム、矛盾が、現地の教師による後輩教師の育成や研修実施を阻み、「受動的な日本語教育環境」という課題を生んでいると指摘する。

第 2 章では、マレーシアの日本語教育の歴史や社会的な文脈について、筆者の認識が示され、それに対する問いとリサーチ・クエスチョンが提示される。マレーシアの日本語教育は、歴史的に日本人教師が指導者として関わる中、民族や教育機関の目的により教師共同体が分断している。また、マレーシアの研究者たちは、マレーシアにおいて日本語教師の養成・研修の場がなく、その必要性を認めていたものの、日本の公的機関がとるパターンリズムの態度を疑わず、自主的に育成・研修を行ってこなかった。筆者は、このような「受動的な日本語教育環境」に対し、「マレーシアにおいて、現地のマレーシア人教師と日本人教師の学び合いの場として、どのような場が必要か。そして、それはどのように実現できるか」という問いを立て、以下の 4 つのリサーチ・クエスチョン(RQ)を提示した。

RQ1：マレーシアにおいて、「教師の学び合いの場」を構築する社会的実践活動を停滞させてきた要因は何か

RQ2：マレーシアにおいて、「教師の学び合いの場」を構築する社会的実践活動を進めるものは何か

RQ3：マレーシアにおいて、「教師の学び合いの場」を構築する社会的実践活動において、「私」という日本人教師にどのような役割が担えるか

RQ4：マレーシアにおいて、「教師の学び合いの場」を構築する社会的実践活動に参加

する教師たちは、実践活動の場をどのように意味づけているのか

第3章では、研究の理論的視座と実践の位置づけが示される。「教師の成長」「協働」「リーダーシップ」といった概念が精査され、理論的視座が構成された。また、長期的な視野で一つのエリアを見つめる「エリア研究」の視点を取り入れながら、日本語教育研究者が自己省察的な態度で行う「エリア日本語教育研究」の実践の必要性が主張され、実践アプローチとして、省察と改善を繰り返す「クリティカル・アクション・リサーチ」が位置づけられた。

第4章は、研究方法論と研究手法が示された。記述アプローチとしてエスノグラフィーの手法が用いられ、記述の補完にアンケートやインタビューのデータも使用された。場の構築のプロセスに現れる教師たちの発話、行動を記録した筆者のフィールドノートや筆者のジャーナル（省察）の記述、アンケートやインタビューの回答はM-GTAが援用され分析された。

第5章は、ベテランマレーシア人教師を対象とした「教師の学び合い」に対する意識調査を基に以下の通りRQ1・RQ2に答えた。

RQ1：教師の学び合いの場を構築する社会的実践活動を停滞させてきた要因とは何か  
RQ1の解：「他者と共に学び合うことへの自信のなさ」によって、「共に活動するマレーシアの専門家が集う結びつきを作り出せていない」こと

RQ2：教師の学び合いの場を構築する社会的実践活動を進めるものとは何か

RQ2の解：結びつきの実践

第6章と第7章は、5章でRQ2の解として提示された「結びつきの実践」に関する4つの実践の報告および分析・考察がなされた。この考察の過程で「キーパーソン教師」「ピア・リーダーシップ」などの鍵概念が導入される。

実践1では、「日本語MAコース設立」というプロジェクトにおいて、これまで交流がなかった異なる共同体の教師たちが集い、「教師の学び合いの場」が構築される過程が記述された。同プロジェクトへの関与を通して、教師たちは自己肯定感を感じていたことが見出された。実践2では、実践を通して、「教師の学び合いの場」を構築する

には、同僚に垂直的に働きかけ、「ノットワーキング」の役割りを務める「キーパーソン教師」が必要で、それが外国人である日本人教師に担えることが明らかにされた。実践 3・4 では、一つの学び合いが他の学び合いや実践や活動を動機づけ、拡張するということを明らかにし、「ピア・リーダーシップ」という共に学ぶピアが作り出すスピリッツが、相互に影響し合うことが確認された。

第 8 章では、上記の「結びつきの実践」で得られた RQ に対する回答を中心に考察され、「キーパーソン教師」、「ピア・リーダーシップ」という 2 つの新しい鍵概念が「学び合いの場」構築との関連で説明された。「ピア・リーダーシップ」とは、メンバーそれぞれが持つ情報を生かし、それぞれの能力を発揮しながら、自分たちで省察、改善し、学びを鼓舞し、学び合いに導くスピリッツである。「ピア・リーダーシップ」によって生まれた環境の中で、学び合いを率先する者が入れ替わりながら活動を進められ、活動を進めることで「キーパーソン教師」としての責任やその自覚が生まれる。この自覚こそが「キーパーソン教師」に重要な要素であり、「キーパーソン教師」とは、パワー・リーダーでも、職務でもなく、「ピア・リーダーシップ」との相互作用から生まれる「自覚的な存在」である。同時に教師たちや「ピア・リーダーシップ」も、「キーパーソン教師」の働きかけに鼓舞される。このように「ピア・リーダーシップ」と「キーパーソン教師」は相互に関係し合いながら、「学び合いの場」の構築が促進されると説明される。

第 9 章は、本論文の結論として第 2 章に提示された「教師の学び合いの場」に関する問いに対し回答された。すなわち、教師が学び合う「場」として必要なのは、それぞれの共同体の境界を越えて教師たちが集う場・開かれた公共の場・抱える課題を映し出す場・省察の場である。「場」は、マレーシア人教師と日本人教師が、それぞれが考える役割とそれぞれの居方で場に関わり、それぞれにとっての日本語教育の意味を考える場である。そのために、教師たちはここで、それぞれが考える日本語教育の意味と意味を結びつけ、それぞれが考える意味に存在する異なりを認め、日本語教育の意味を再構築するのである。この再構築こそが協働構築であり、この協働構築によって、「教師の学び合いの場」が実現するのである。

### <本論文の評価>

本論文は、マレーシアという具体的な教育現場において、筆者自身が、教育実践者として省察と改善の実践を繰り返し、教師をエンパワーメントする目的のために「学び合いの場」を構築した記録である。日本語学習者数が多いのにもかかわらず、日本からの支援に依存しがちなマレーシアにおいて、キーパーソン教師であるとの自覚の下、受身的なマレーシア人日本語教師たちに「垂直的な働きかけ」を行い、学び合いの場を作り出し、マレーシア人教師たちに日本語教育者としての自信と積極性を醸成したことは、高く評価できる。その過程で、「キーパーソン教師」「ピア・リーダーシップ」「ノットワーキング」などの概念を援用し、「学び合いの場」の協働構築の方法と意義を、実証的に提示できたことは、同様の環境にある海外の日本語教育に多くの示唆を与えるものと言える。

一方で課題もある。内容的な面では、マレーシア人教師によって、持続可能な学び合いが可能になるかについて、クリティカル・アクション・リサーチというアプローチで語られているが、論考の読み手に向けた訴求力が十分ではない。今後、マレーシア人教師たちが民族や機関の壁を越えて互いに働きかけ、ノットワーキングをしていけるかは未知数である。また、海外の日本語教育の支援や推進を支援する国際交流基金やJICA(国際協力機構)への政策に対し、より明示的な提言があれば、よりよいものとなったであろう。構成的な面では、多様な概念を駆使し、複数の実践から、4つのリサーチ・クエスチョンに対し、繰り返し回答する論述の方法は、複雑で概要がつかみにくい。より効果的な構成も可能であったであろう。

### <本論文の判定>

上記のような課題を残しつつも、本論文は、日本政府主導になりがちな海外の日本語教育現場において、実践者の視点から日本語教育のあり方を示したことに大きな意義がある。よって、本論文は、博士(日本語教育学)の学位を授与するに値する論文と認められる。

なお、本論文にあった誤記は、添付の「日本語教育研究科博士学位申請論文修正リスト」のとおり修正されたことを確認した。

日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト

博士学位申請論文 題目	日本語教師の学び合いの場を協働構築する意義 ーマレーシア人教師と日本人教師による社会的実践活動の分析からー	
申請者	木村かおり	
修正リスト提出日	2019年8月20日	
ページ番号・行	修正前	修正後
【概要書】		
p.ii 2.3.1	「研究目的」の前にスペースあり	(削除)
p.iv 5.3.2	インタビュー分析結果	インタビューの分析結果
p.iv 6.2.1	「共同体」の前にスペースあり	(削除)
p.v 6.3.2	「先行研究」の前にスペースあり	(削除)
p.v 6.3.5.2	学びの場に	学びに
p.vi 7.2	実践3 (半角)	実践3 (全角)
p.vii 7.3.3.2	「ー」の形式が他と不統一	統一
p.x 5),6)	ゴシック体	明朝体に
p.1 L.1	《はじめに》	《はじめに》
p.6 下L.3	本章では、活動と	本章では、(削除)
p.7 L12	みとめ	認め
p.10,11	《おわりに》、《参考文献》	《おわりに》、《参考文献》
p.11 L.17	.. (半角)	.. (全角)
p.11 L.22	副題の「ー」の形式が不統一	「:」で統一
【本冊】		
p.11、4段目 L.1	マレーシア国費	日本に
p.12 L.4	(自分たちで) 研修を行い	(自分たちで) (削除)
p.17 2段目 L.2	質の	質を
p.22 L.9	上級講師 教師	Pensyarah Kanan (Senior Lecturer) Guru Bahasa (Language Teacher)
p.23 3段目 L.2	(求められている) の	(求められている) こと
p.31 最終段 L.2	インデント	1文字つめる
p.32 1,2段目	RQ3の解、RQ4の解の表現不統一	p.108の解と表現を統一

p.32 最終段 L.4	。しかし	。(削除)
p.32 最終行	だが	さらに
p.32 脚注	「教師仲間」と限定	複数であることを強調
p.33 1 段目	RQ2 の解の表現の不統一	p.137 の解と表現を統一
p.35 L.6	みとめ	認め
p.40 下から L.4	現在の価値観の多様化する	価値観が多様化している
p.47 L.6	教師たちで「協働学習」を省察	他の教師たちと省察
p.47 L.7	どこの国でもない	4人の教師の国に限定しない
	合うことで、	合い、それぞれのプロセスに見られた
p.47 L.16	受講生	研修受講生
p.53 L.8	ばらばらな価値観	価値観がばらばらな
p.56 3 段目 L.10	行わる。	行われる。
p.57 L.3	(学生を) フォロワーと呼ばず	(学生を) (削除)
p.58 脚注	をモデル化している。	のモデル化。
p.64 L.7	であるが、	ある。また
p.64 L.8	「クリティカル」の	(削除)
		(追加)、クリティカル理論によって
p.65 L.4-10	また、このような・・・	削除と追加
p.68 L.10	するために働きかける	しようとする
p.70 L.4	まとめ、本研究・・・。	まとめる。(削除)
p.74 3 段目	(文の順がおかしい)	L.1,2 目を 3 段目最後に移動
p.89 下から L.7	だが	それでも
L.6	することを支えた。	した。
p.100 図 7	M 大	B 大
p.105 L.4	どんな	どのような
p.106 L.8	なかった。(p.107・・・)	なかった。(削除)
p.107 L.2	再開	活動を開始
p.109 3 段目 L.1	第 6	第 6 章
p.111 節題 7.2	実践 3 (半角)	実践 3 (全角)
p.112 L.10	(協働 AR)	(以下「協働 AR」と略称)
p.115 下から L.6	収集	収集
p.116 L.1	カンファレンス	「カンファレンス (検討会)」に統一

L.4	出した。	出した。
p.121 概念 14	インデント	1文字下げる
p.134 L.7	確信を	確信が
最後	発表が	発表は
p.135 L.6	この授業を作った	このような授業を作り出す
p.137 2 段目	RQ2 の解	p.189 RQ2 の解と表現を統一
p.139 1.6	場の構築の	場を構築する
p.141 L.6	調査では	調査のデータとして
L.8	に行い、フィールドノーツに・・・	に行った (以下削除)
	インタビューデータ	インタビューのデータ
	インタビューデータの分析は	データの分析には、
L.9	参照し考察した。	参照した。
p.141 脚注 74	・・・。。勉強会・・・。	勉強会は・・・。。。。。。。
p.143 節題	(時間) — (時間)	-で統一
p.161 2 段目	注 82	注 88
p.168 脚注	注 79	注 85
p.180 4 段目		1行スペース
p.184 1 段目	RQ4 の解	p.108 RQ4 の解と表現を統一
p.185 2 段目 L.4	出され	出し
L.10	ことを	と
p.190 L.2	活動であった	活動をつづけるネットワークングで あった。(p.189 の解と表現を統一)
p.194	9.2 1) の後ろスペースがある	(削除)
pp.199-213	副題の「-」の形式が不統一	「:」で統一
p.201 L.5	単語の間にスペースがある	(削除)
	英文タイトルの表記の不統一	頭文字を大文字に
L.8	連名のあとの「,」	「、」で統一
p.202 L.1	未記入	原書の情報を記入
p.229	「本論文中の I 先生」	(削除)
p.231 L.19	未記入	「(2019 年)」挿入